

オペラ『三郎信康』（本文篇）

“Saburo-Nobuyasu” Opera in two acts (Libretto)

渡 部 成 哉

Seiya WATANABE

はじめに

この文章は、オペラ台本の本文篇（今年度、紀要第45号）、および年表・参考書目・各場解題・註釈・改訂部分・初稿・創作ノートその他による資料篇（来年度、紀要第46号）から構成される。枚数の都合もあり、資料篇はさらに二分割され、その後半部分は再来年度（紀要第47号）に及ぶかもしれない。

本文篇であるオペラ台本は、静岡県浜松市にある「アクトシティ浜松」大ホールの四面舞台で上演されることを想定して書かれた。とはいえ、私がこの仕事に着手した折には、当該ホールはまだ建設中であり、台本の依頼者である浜松市文化振興部音楽振興課（現在）の希望は、いずれ完成するであろうその舞台の機能を十分に駆使できる場面構成であること、オペラの題材は浜松ゆかりの徳川家康とその嫡男・信康の物語であることとその柱としていた（その他の依頼内容・条件等については、資料篇で述べる）。

この台本が全部で十の場面から構成されているのは、ひとつの幕の中に全く異なった場面を共存させ、四面舞台の優れた機能性を広く知らしめたいというその依頼に添ったためである。

四面舞台は、主舞台後方、および上手・下手側に、舞台面と同程度の広さを

もつ三面の空間を有し、そのいずれかに次の幕の舞台装置を組んでおいて、幕間の舞台転換をすみやかにこなすというのが本来の狙いである。しかるに、私に課せられた依頼内容はそれをさらに進めて、一幕が進行するうちに別の舞台装置による場面を重ねたいというものであった。

言うまでもなく、オペラ的一幕は、原則としてひとつの場面（ひとつの大道具）で通されるのが一般的でもあり、効率もよい。経済的な効率をいえば、全幕ひとつの大道具で済ませられるのがさらによいのである。それに対して、吊り物の上げ下げなどによらず、音楽が進行する最中に各場面それ自体を飾り替えるというのは、まずは大胆な発想というべきではあった。

しかし、いかなる機能特性をもった四面舞台ができ上がるかは未知数であり、どのように動かせるか（動かせないか）担当者にさえわからぬ四面舞台に対し、ひとまずは保険をかけるかたちで、この台本の場面構成を考えておく必要を私は感じた。装置を飾り替えるというアイデアが万一実現不可能となっても、台本そのものの書き直し（当初示された日程では、執筆から上演までの時間がかなり短かったから、書き直す余裕などは皆無であった）が生じたり、現場作業が混乱したりしないための配慮である。その際、私の頭にあったのは、見慣れた歌舞伎の舞台転換の方法のようなものであった。この点については、資料篇の中で詳述する。

歌舞伎といえ、この台本は、舞台面から客席後方に向かってまっすぐに延びた本花道があり、上手側からやはり客席後方に向かう仮花道も設置できるという想像を楽しんで書いた(第一幕第一場、同第二場、同第四場、同第五場、第二幕第三場、同第四場、同第五場)。原則として、本花道はこの世への、仮花道はこの世ならぬ世界への通路である。ただし、こうした機構をもつ演奏会場は私の知るかぎりなく、現実の「アクトシティ浜松」大ホールにも常設の花道はない。

次に、このオペラの題材であるが、本文にあるとおり、世にいう「築山殿始末」(築山事件)をその核心としている。

家康の正室・築山殿は、駿河今川の一門に連なる関口刑部少輔親水の女(むすめ)で、今川義元の姪にあたり、駿河(の)御前とも、また後年岡崎の築山というところに住んだため築山殿または築山御前とも呼ばれる。その築山殿と信康の母子が、家のためには敵である甲斐武田と通じた等々の訴えが、信康の妻である徳姫(五徳とも)から父・織田信長になされ、ために激怒した信長は、家康に対し築山殿および信康を除くようにとの要求をなした。また一説に、将としての器すぐれた信康の将来に危惧の念を抱いた信長が、早い段階でその女婿を排除する決意をしたともいわれ、要求を受けた家康は、郎党に命じて築山殿を殺害させ、ついで信康を自刃に追いこんだとされるものである。これに材をとった創作、また家康の事跡を追った文章の多くは、おおむねこうした筋書を追っており、その意味でひとつの通説を形成している。

これもまた資料篇に「築山殿始末——私の解釈」として書くように、こうした通説なるものを、私は全く信じていない。築山事件は、簡単に記せば、家康の岡崎家臣団と浜松家臣団の反目といったようなところにその事実が求められよう。築山殿と信康は、なるべくして、あるいは不幸にしてそれにまきこまれたにすぎない。とはいえ、事実だけでオペラ(劇)が構成可能なわけではないし、全き事実を求めることは必ずしも創作の任務ではない。

田中喜三の芝居「信康」(昭和49年初演。平成8年9月、歌舞伎座にて再演)は、大詰の信康自刃の場面で、その介錯の役目を父・家康にあてており、現実

としてはおよそありえぬことながら、作者の眼目とするところが「父と子」であるならば、それもひとつの描き方であろうし、岩崎栄「徳川女系図」、榊山潤「戦国無情」などの読み物の荒唐無稽や、あるいは史実に遠いと思われる部分を禁じては、そもそも大衆小説は成り立つまい。

私も自分の「三郎信康」を、通説とされ多くの人が了解していると思われる筋書に、ある程度までは従って書くことにした。

「三郎信康」の最初の原稿は、平成5年の秋から、まず映画シナリオのようなスタイルで書かれた(資料篇にその一部を収録)。

次に、そのシナリオのセリフをもとに、オペラ台本のかたちに書き改めた第一稿をつくり、さらにそれを短く削っていくことで作曲のための第二稿を仕上げた。今回掲載のオペラ台本「三郎信康」は、作曲者に手渡されたその第二稿である(一部、第一稿の記述を復元)。

とはいえ、第一稿と第二稿とは、さほど時日を隔てて書かれたものではなく、場面によっては、ほとんど並行してつくられている。それは、当初、平成7年10月の「アクトシティ浜松」開場一周年記念としてこのオペラを上演(初演)したいとの意向で企画が進められており、執筆期間がきわめて限られていたため、可能なかぎり、できた部分から作曲者に渡していくという手段を講じるほかなかったからである。

さて、以上の経過の果てに、この台本は、いずれ第三稿(または最終稿)がつくらなければならないであろう。オペラを実際の音にするという作業の過程で、また現実の舞台面の事情にあわせ、(本意にせよ不本意にせよ)必ずや手直しの必要に迫られることは、舞台を経験した者なら誰にでも分かるはずのことだからである。また、この台本が二幕に分割されているのは、「因」と「果」という内容によってなされているのであって、演奏時間その他の都合によつては、別のかたちが望まれるかもしれない(その場合は、現行の第一幕第一場、第二場を新たな第一幕、同じく第三場から第五場までを第二幕に、さらに現行の第二幕第一場から第三場までを第三幕、第四・第五場を合わせて第四幕とするのがよろしかろう)。

すでに、女声の出演者の人数を増やしたいという意向を受け、第一幕第二場に「六人の乙女」を、第一幕第四場に「二人の子守娘」の役を私は案出しており、その原稿も書き上げているが、今回のものには収録していない。それらもまた資料篇にゆずることとする。それは、私の書いた初期の台本に一番近いものを、上演のための最終稿の以前に、こうしたかたちでひとまず提出しておきたいと考えたからであった。

オペラ

『三郎信康』 台本

作・渡部 成哉

時代は戦国の世、天正六年（二五七八年）春より天正八年（二五八〇年）春に至る二年間。但し、舞台はこの時系列に沿って展開しない。ここに描かれる出来事は、世に「築山殿始末」と呼ばれる顛末であって、事件のアウト・ライン、日付等は、『徳川實紀』、『改正三河後風土記』、『家忠日記』、『三河物語』、浜松、岡崎、天竜各市編纂による『市史』、小山正『戦國哀史 築山御前』等による（参考書目一覽別紙）が、事実の解釈については、必ずしもこれら資料には従わない。また、本文中の日付、季節の指定は、当然のことながら陰曆に拠るものである。

人物

- 岡崎三郎 信康（テノール）
- その室 徳姫（ソプラノ）
- 村娘 み（ソプラノ）

服部 半蔵（テノールまたはハイ・バリトン）

天方山城守通綱（バリトン）

医師 滅敬（バス）

大久保 忠世（バス）

（一歌手二役可能）

小侍 從（メッツォ・ソプラノ）

石川 義房（バス）

岡本 時仲（バリトン）

野中 重政（テノール）

浴衣の男 男 実ハ甲斐ノ間者（テノール）

簑笠の男 男 実ハ甲斐ノ間者（バリトン）

簑笠の男 男 二 実ハ甲斐ノ間者（スタント・マン） *築山御殿の場では黒装束の者

徳姫侍女 甲（ソプラノ）

徳姫侍女 乙（メッツォ・ソプラノ）

築山殿侍女 丙（ソプラノ）

築山殿侍女 丁（アルト）

年上の姫 信康・徳姫息女ふく（子役）

年下の姫 信康・徳姫息女くに（子役）

岡崎城の侍、侍女

風流踊りの人々

浜松城の侍、侍女

大樹寺で遊ぶ子供たち（児童合唱）

（合唱）

織田 信長（テノール）

徳川 家康（バリトン）

その室 築山殿（アルト、またはメッツォ・ソプラノ）

第一幕 第一場

天正六年（一五七八年）九月。岡崎城内。深夜。

本花道・仮花道とも本舞台へ至る廊下の体。

城中の一室にして、よきところに行燈、屏風など。また、

長押の檜などほどよく。

*打楽器のトレモロが不気味に響いている。

*短い、緊迫した前奏に続いて幕開く。

ト城中の女ども、仮花道より青ざめて走り来たる。

手燭をかざしたる者、長刀を手挟む者など。

女どものうち数人が本舞台中央に集結したるかたちとなり、

残りは花道七三にて、

女の声 どなたか！

女の声 どなたかおられませぬか。

女の声 お出会いを！

女の声 お出会い下さりませ。

ト家臣の一団、本花道より走り出る。

家臣の一団、客席を挟んで女どもと対峙する体にて、

家臣たち いかげんしたした？（ト本舞台へ走り出る）

女たち ト女どもの内には、家臣の男に思わず縋りつく者もある。

家臣たち 小侍従殿が…

女たち 何？

家臣たち 小侍従殿の亡霊が、また…

家臣たち またしてもか…（ト家臣たち、互いの顔を見合わせる）

女たち また恐ろしき形相で…

トその場に座り込む女がある。

家臣たち、めいめいの刀の柄に手をかけ、

家臣の一人 して、怨霊めはいずこに？

長刀を持つ女 はて、最前までこの辺りに…

ト家臣らと女たち、三つ四つの群に分かれ、めいめいがそれと思しき方を恐る恐る眺めるうち、

女の一人 あっ…（ト腰を抜かして、手燭をとり落とす）

この時、白装束の小侍従の亡霊、宙乗りにて浮ぶ。白塗りにて、口は耳まで裂けるほど。

小侍従 恨めしや、信康

小侍従 恨めしや、信康
ト家臣たち刀を構えるものの、手が出せない。

小侍従 恨めしや、信康

*小侍従のヴォカリーズが気味悪く城中に響き渡る。

ト徳姫、駆け来たる。

侍女 甲 姫様、危のうございます。

侍女 乙 姫様、お戻りを。

徳姫 （狂ったように）小侍従…、小侍従…

侍女 甲 姫様、お戻りを。

侍女 乙 姫様、お戻りを。

徳姫 なんとしたことじゃ、小侍従、許しておくれ…

トこの間に小侍従の亡霊、いずこともなく飛び去る。

この時、信康現れて、

信康 何の騒ぎじゃ？

皆々 信康様。

家臣の一人 小侍従殿の亡霊が…

信康 何？

徳姫 （信康の前に進み出て）殿。

信康 おお、奥か。

徳姫 殿、殿が無体にも突き殺された小侍従が成仏出来ず、あれあのよ

うに迷うております。

信康 （徳姫は見ずに）小侍従がいずこに？ ……信康には見えぬ。

徳姫 何と？

信康 信康には見えぬ。（徳姫に向き直り）よいか。あの者は、あることないこと言い立てて、この岡崎までを愚弄致したのじゃ。口を裂いても足りぬ憎い女子へおなごじゃ。それゆえ浄土にも行けず迷うておるにちがひあるまい。亡霊など恐れるに足りぬ。存分に迷わせておけばよいわ。

信康 （一同の者に向つて）下つて休むがよい。怖れの心が、ありもせぬ幻を見せるのだ。

ト信康、呵々大笑して去る。果然と見送る家臣たち、女たち、そして徳姫。

家臣たち、女たち、少しずつ去る。

徳姫、中央にて、

徳姫 殿

殿のお心が

わからなくなる時があります。

勇猛な三郎君

お優しい三郎様

いづれがまことの殿なのか。

あの折

小侍従も言い過ぎました。

されど小侍従は清洲より

わらわと共に育った者でした。

その者を目の前で殺され

わらわがどんなに悲しんだか。

殿

殿はわらわの父・信長に

あまりにもよう似ておられます。

それゆえ、殿

殿のお心が

ふとわからなくなる時があります。

ト徳姫、侍女に助けられるようにして退場。

舞台上手に服部半蔵、天方通綱の二人が残される。

通綱 （遠くを見やる心にて）あの花見の日からだ…

半蔵 何？

あの花見の日以来、この城には黒雲がたちこめているかのようだ。

半蔵 いつもの取越し苦労を…

いや、わしにはそう思えてならん。もっと悪いことが起きるよう

な気がしてならんのだよ、…半蔵。

ト半蔵、通綱の両名を照らしていたスポット、静かに消え

ゆく。

同 第二場

天正六年（一五七八年）三月。岡崎城の前を流れる菅生川に面して張られた花見の宴。

舞台一面に桜の吊り枝。

舞台上手には一段と華やかな今川ぶりの宴席が設けられ、

着飾った築山殿をはじめ、女どもが居並ぶ。

本花道は、城中より菅生川に至る石段の心。

遠見に岡崎城。

トそれぞれ桜の一枝を手にした女たちが踊っている。

女たち ああ、

冬去りゆきし岡崎に

桜の花が開くとき

御国の光に照り映ゆる

桜の花が匂うなり。

ト女たちの乱舞の様激しくなり、宴が一層盛り上がる。

*突如として静かな音楽へと転じる。

ト徳姫の一行が本花道を進んで来る。

徳姫が花道七三に至った時、

よく参られたの。

築山殿 お招きをいただき…(ト軽く会釈をして宴席へ進む)

徳姫宴席につくと、

築山殿 姫たちはいかがした?

徳姫 いまだ幼な子ゆえ、置いてまいりました。

築山殿 それはそれは…

徳姫 (やや高い調子にて) 姫二人をお目にかけては、またご不快かと…

築山殿 (いささかムツとして) まこと、世継ぎの男子はいつ生まれるのか

のう。

ト徳姫、従う小侍従が身を乗り出そうとするのを止めて、

徳姫 相済みませぬ。(意味ありげに) わが君、三郎君が戦より戻られ

ましたなら…

築山殿 (皮肉に) それはそれは…

トこの時、「若殿ご帰還」の声あり、具足姿の信康が半蔵、

通綱ら供の者を七、八名連れ、入ってくる。

信康 母上様、駿河・田中の城を攻め、ただ今戻りました。

築山殿 駿河を…のう…

信康 はい。

築山殿 三郎殿には、伯父御の駿河を攻められたのか。

信康 またそのお話しか。われらは今、織田殿と共に武田と戦う身です

ぞ。

築山殿 わかっておる、わかってはおるが…

ト小侍従、進み出て、

小侍従 殿様、御台様——徳姫様もお越しでございますぞ。

信康 母上とお話し中じゃ、しばし待て。

小侍従 殿様!

徳一姫 小侍従!

小侍従 いいえ姫様、今日こそは言わせて下さいませ。(信康に) 殿様、

徳姫様は殿様の奥方様にございませぬ。

信康 わかっておるわ!

小侍従 戦からお戻りになれば、まずお言葉をおかけ下さるのが筋道とい

うもの。

信康 しばし待て、と言っておる!

小侍従 いいえ、殿様お留守にかように華美な宴を張り、加えて駿河の今

川のと。今川なぞとうに、徳姫様の御父君・織田の信長様に滅ぼさ

れたものを。

信康 おのれ、何と申した!

徳一姫 小侍従!

小侍従 戦、戦とおっしゃいますが、岡崎の衆は兵馬・兵糧の調達が主な

お仕事。戦の前面にお出になるのは浜松衆。その浜松衆とて、信長

様のお駒のひとつにすぎませぬ。

信康 おのれ、その分には捨ておかんぞ!

ト腰の小刀を引き抜き、小侍従を刺し貫く。

一同 おお!

徳一姫 小侍従!

信康 岡崎のこと、とやかく申すこと許さぬ。信長殿は信長殿、信康は

信康じゃ。参ろうぞ!

ト供の者を連れて退出する。

徳一姫 小侍従…

ト小侍従にとり縋って泣くうち、

*弦楽器の音のみを残して、静かに暗転。

同 第三場

天正六年（一五七八年）初秋。築山殿の館内。夜。
舞台中央に居室があり、回り廊下をめぐらせて、上手・下手とも草木の茂る庭の心。

*静かで、ゆるやかな音楽。

ト脇息にもたれた築山殿が、鍼医師・減敬と対座している。

減敬 風が出てまいりましたな。

築山殿 穏やかな駿河の気候に慣れた者には、この岡崎の地はちと辛い。

減敬 はあ：

駿河が恋しいのお。華やかな今川のお館。京の都にも負けぬという美しさであった。

減敬 帰化人の私めには、どの地も辛ろうございます。

築山殿 以前おったという甲斐もか？

この国の生れでないゆえ、いずこに参りましても白い目にて見られる身の上：

築山殿 しかし、そなたは医師として確かな腕を持っておられよう。

減敬 それなくしては、世を渡って参れませぬゆえ。

築山殿 （聞かぬふうに）駿河が恋しいのお。

減敬 ならば、いっそ甲斐へお越しになりますか。

築山殿 何と？

トこの時、「曲者！」の声あり、侍女丙、丁が手燭で下手側の庭を照らすと、黒装束の者がバク転して消える。

築山殿 何の騒ぎか？

侍女丙 いずれかの間者かと。

侍女丁 ご油断なきよう。

築山殿 案ずるな。下がってよい。

ト侍女丙、丁共に下がる。

築山殿 （改めて、低く）甲斐へ参れと申したかの？

減敬 いかにも。

築山殿 その方、もはや甲斐とは無縁と、いっぞや申しておったの。

減敬 甲斐・武田勝頼様からのこの書状、是非ともご披見下されたく：

（ト懐から書状を取り出す）

（それには目もくれず）何、武田とな。この岡崎が武田と戦をしおることは存じておろう。

減敬 いかにも。

築山殿 その武田めに内通せよとか？

減敬 内通ではございませぬ。甲斐へお越しを、と申し上げております。

三郎信康君共々に。

築山殿 三郎も？

減敬 はい、勝頼様、信康君の武名をよくご存じ。甲斐へおいで願えれば百人力と：

ば百人力と：

築山殿 たわけたことを！

減敬 御前様！（ト築山殿の手を取ろうとする）

築山殿 無礼者！ 減敬、即刻甲斐に立ち戻り、武田殿に無用のことと伝えよ。

えよ。

減敬 （畏まって廊下まで退き）それでは、これにてご無礼を。

減敬 （下手の廊下端まで行き）家康に恨みを抱いていようと思ったに、

とんだ不調法だわ。どうれ、足元の明るいうち、甲斐へたち戻るとするか。（ト退場）

ト上手の繁みから服部半蔵姿を現わし、減敬の去った廊下を睨みつけるうち、暗転。

同 第四場

同じく天正六年（一五七八年）の初秋。大樹寺の山門および境内。

舞台下手に大樹寺の山門、上手は境内の体。

本花道は、山門を出て岡崎へ至る街道の心。

遠見にかすかに岡崎城を望む。

*童歌を模した音楽が流れている。

ト山門上に信康が寝そべり、傍に村の娘・みのが正座して
いる。

上手境内では、子供たちが二手に別れて遊んでいる。

子供たち（歌う）欲しや、欲しや、

子供たち どの子が欲しや、

子供たち 信太が欲しや、

子供たち 信太はやれぬ、

子供たち どうでも欲しや、

子供たち どうでもやれぬ、

信康（寝そべったまま）子供はよいなあ、みの。

みの はい。

信康 みのが子供が好きか？

みの（明るく）はい！

信康 ならば、みの、おれの子を産んでくれ。

みの（顔を赤らめて）さ、それは…

信康 いやか？

みの いいえ… その…

信康 鷹狩りの折

お前を知って半年になろう。

なぜお前は

体を許そうとしないのだ。

いつぞやも

お前を抱こうとした時

お前は蒼白い顔で

《舌を噛んで死にます》と言いつつ放った。

なぜじゃ？

この信康が嫌いか？

みの いいえ、殿様。（首を振る）けしてそのような…

信康 では、なぜじゃ？

みの は身分卑しき者…

信康 それがどうした！

みの 読み書きも出来ませぬ。

信康 読み書きなどは要らぬこと。女子へおなごは、いや男とて知に

過ぎる者は嘘をつく…

信康 お前が側にいると、おれの心は休まる。合戦に疲れた身も心も鎮められる心地がするのだ。

みの いいえ、殿様、それは出来ませぬ。みのは、殿様のお心にお応え

出来ぬわけがございます。

*子供たちの歌う声が静かに流れ始める。

ト子供たちの遊戯が、緩やかに影絵のごとくまた始まる。

子供たち 欲しや、欲しや、

子供たち どの子が欲しや、

*その声に被せるように、

信康 わけ？ わけと申したか。そのわけとは何じゃ？

*子供たちの歌声が流れている。

みの（意を決したように）二俣のお城の落ちたその時

逃げゆく武田の落人に

武田の落人に…

みのは：

みのは手ごめにされました：

信康（驚いて）何じゃと：

みの 落城の血に狂った男たちが

みのを：

みのを無理やり抱いて：

みのは屑布（へぼろ）のように捨てられ

畑の土にまみれて

泣きました。

ト遊戯に勝った子供が、負けた方の子供のひとり、無理

やり自分の側に引きこもうとする姿が見える。

みのは山門の外れまで行き、自らの肩を抱いて、

みの

みのは

男の方が怖い：

合戦をする殿御は

もっと怖い：

信康（静かに）みの、信康には男の子がない。お前におれの子を、男の

子を産んでもらいたいのだが、それはお前の新たな悲しみになろう

な： トみの、何も答えず、耳を塞いで肩を震わせている。

信康 みの、お前の悲しみが溶けるまで待とう。信康はまだ若い。（ト

再び山門に横になる）

* 急迫した音楽に転ずる。

ト同時に、本花道より服部半蔵、血相を変えて走り来る。

半蔵 若、甲斐の間者を城下まで追い詰めましたが、見失ってござい

ます。

ト楼上の信康、すばやく半身を起こして、

信康 何？

半蔵 あいにくと、本日は風流（ふうりゅう）踊りの日：

信康 それがいかがいたした！

半蔵 城下は人にあふれ、めざす者を捕えるのは容易なことではありま

すまい。

信康 初手から諦めて何とする！

信康（はね起きて）して、滅敬めは？

半蔵 あるいは甲斐へ落ちのびたかと。

ト信康、ぎゅっと唇を噛みしめる。

信康、恐怖に瞳を開いているみのに、

信康 みの、おまえは急ぎ城へ行き通綱に伝えよ。手勢を連れて城下ま

で出るようにとな。よいな？

みの ……はい…、でも…

信康 なんじゃ？

みの ……お気を…つけて…

信康（みのの肩に手を置き）信康は戦に生きる者、死を恐れはせぬ！

ト信康、みのの手をとり、その瞳をじっと見詰めながら、

信康 だが：

その方のおる限り

信康は死なん！

ト信康、脇にあった刀を腰に差すと、

信康 半蔵、続け！

半蔵 おう！

ト信康主従、花道を転がるように駆けていく。

みの、信康に取られていた手を胸の高さにそっと抱いて、

* 信康の歌と同じ音程にて、感情をなぞるように、

みの その方のおる限り

信康は死なん：

そうおっしゃって下さった。

その方のおる限り：

ならば殿様

みのはお側におりましょう。
この命のある限り：

トみの、信康主従の後を眺めやる思い入れののち、同じく花道を駆け出していく。

*間奏曲始まり、やがてそれは幾度も転調を経て、賑やかな風流踊りの音楽へと代わってゆく。

道具廻る。

同 第五場

岡崎城下。中央よりやや上手寄りに太鼓を載せたる槽。本花道・仮花道ともに街道の心。

ト揃いの浴衣に身を包んだ老若男女が風流へふりゆうへ踊りを踊っている。

領民たち

風流踊りじゃ
踊ろでないか

憂さも戦も皆忘れ

風流踊りじゃ

踊ろでないか。

トやがて、踊りの輪に次々と人が加わり、大きなうねりのようになっていく。

ト蓑笠をつけた男が二人、人目を忍ぶように入ってくる。

それを見つけた浴衣の男のひとりが素早く側へ寄って、

どうした？

浴衣の男

蓑笠の男

浴衣の男

蓑笠の男

見破られた：
なんだと？
急ぎ甲斐へたち戻らねば：

浴衣の男

待て、今はまずい。

浴衣の男

(蓑笠の男二を見て) この者は？

蓑笠の男

交替のため、今朝方甲斐より参った者：

浴衣の男

ト浴衣の男、蓑笠の男たちに何やら耳うちをする。

蓑笠の男

着物を替え、人ごみに紛れて抜け出すのだ。

浴衣の男

ト蓑笠の男たち、うなづく。

蓑笠の男

浴衣の男、蓑笠の男二人をものかげに連れて行き、浴衣に着替えさせる。

蓑笠の男

その間に浴衣の男は、槽上で太鼓を打つ男に何やら話しかけている。太鼓を打つ男、槽より降り、太鼓の撥を浴衣の男に渡す。

蓑笠の男

蓑笠の男たち、浴衣へと着替え終わる。

蓑笠の男

浴衣の男、蓑笠の男二の手に撥を渡しながら、槽上を顎で指して、

蓑笠の男

あの上ならば、かえって気づかれまい。

蓑笠の男

ト蓑笠の男たち、にやりと笑って、

蓑笠の男

ト浴衣姿に身を替えた蓑笠の男二、槽にかけ上がり、太鼓を打ち始める。

蓑笠の男

ト踊り、ますます激しくなる。

領民たち

人々の額に汗が光り、その表情が恍惚としてくる。

風流踊りじゃ

踊ろでないか

憂さも戦も皆忘れ

風流踊りじゃ

踊ろでないか。

ト蓑笠をつけた男が二人、人目を忍ぶように入ってくる。

それを見つけた浴衣の男のひとりが素早く側へ寄って、

どうした？

浴衣の男

見破られた：
なんだと？
急ぎ甲斐へたち戻らねば：

蓑笠の男

ト信康、半蔵の二人、本花道より入って舞台下手端まで進み、踊りの輪から遠く離れたところで、踊る人々の一人一人を射るようなまなざしで見詰めている。

浴衣の男

見破られた：
なんだと？

蓑笠の男

急ぎ甲斐へたち戻らねば：

浴衣の男

見破られた：
なんだと？

蓑笠の男

急ぎ甲斐へたち戻らねば：

浴衣の男

見破られた：
なんだと？

蓑笠の男

急ぎ甲斐へたち戻らねば：

通網 若殿。
 トほどなく手勢を引き連れ、天方通網が到着する。手勢は、それぞれに弓矢、槍などを携えている。

信康 （小声で）待て、いましばらく様子を見るのじゃ。お前は向こうへ回れ。

通網 はっ！

ト通網は手勢の半分を連れ、上手、仮花道側へ回る。残り
 の手勢は信康らの後に下がって控える。

ト人々を凝視していた半蔵、

半蔵 若、あれは今朝がた滅敬と言葉を交わしていた男かと…

信康 （身を乗り出して）どれじゃ？

半蔵 ほれ、あの櫓の上の…

信康 ト信康、太鼓を打つ男をじつと見詰めていたが、
 試してみるか…（ト半蔵に耳打ちする）

半蔵 ト半蔵、櫓の下まで進み出て、

半蔵 これ、太鼓を代わってくれぬか？

ト半蔵の男二、ぎくりとする。

半蔵 わしは、岡崎城主・松平信康じゃ。

ト半蔵の男二、ほっとして、

半蔵の男二 これは、お殿様…

半蔵 （すかさず大声で）まこと岡崎の民が殿の顔を知らぬことがあるか！

ト半蔵の男、撥を投げ捨て、懐から短刀を引き抜こうとする。
 信康、手勢のひとりから弓を奪い取ると、素早く矢をつが

えて櫓上の半蔵の男二を射る。

半蔵の男二、もんどり打って櫓から転落する。

すかさず逃げようとする浴衣の男と半蔵の男一。

信康、さらにその二人に矢を射かける。

半蔵の男一 ああ！

浴衣の男 人殺し…

ト息絶える。

人々の悲鳴とともに、踊りの輪が崩れる。

信康、舞台中央に進み出る。

*弦の緊迫したトレモロにのせて、

信康 わしは岡崎城主・松平信康じゃ。甲斐の間者を打ち取った。踊り
 を続けるがよからうぞ。

トしかし、人々は恐怖の目で信康を凝視している。

やがて、人々の中から低い呻きに似た声上がる。

*シユプレッヒ・ゲザングにて、

領民たち 人殺しじゃ…

領民たち 岡崎の殿様は、人殺しじゃ…

トこの時、人ごみを抜け僧形の滅敬が仮花道を去ろうとす
 る。

通網 やつ、そちは滅敬、いずこへ参る。

滅敬 お人違いでございましょう。

通網 （叫ぶ）若殿、滅敬めが！

信康 何！

ト言うが早いか、再び矢をつがえ、

信康 通網、下がれ！

ト滅敬を射る。滅敬、音を立てて倒れる。

人々の中から悲鳴が上がる。

領民たち お坊様まで…

領民たち なんと惨いことを…

ト信康を独りとり残すかたちで、人々の輪が広がる。

信康、人々の冷たい視線を眺めまわしている。

領民たち 人殺しじゃ…

領民たち 岡崎の殿様は、人殺しじゃ…

ト半蔵、通網ら信康と領民たちの間に割って入り、

半蔵 さつらは甲斐の間者！
通網 間者を討ちとったのだ！

ト弁解につとめるが、領民たちの声に圧倒される。

領民たち 人殺しじゃ…

領民たち 岡崎の殿様は、人殺しじゃ…

領民たち お坊様まで…

領民たち なんと惨いことを…

領民たち 人殺しじゃ…

*これらの声がクラスタのように響くうち、

領民たち、齒の抜けるようにその場を立ち去っていく。

半蔵 若…

通網 若殿…

ト言いながら、信康の側に寄る。

信康 引きあげよ。

半蔵 かし…

通網 若殿お一人では…

信康 引きあげよと申すに！

ト兵卒は死骸を片づけ、半蔵、通網らはひっそりと引きあげる。

信康、独り残される。

*遠くで領民たちの声がする。

ト信康、櫓に上がって太鼓を乱打し始める。

*太鼓に重ねて音楽が頂点に達した時、

みの、上手より入ってくる。

みの 殿様…

信康 みのか…(ト櫓より下りる)

みの はい、…ご無事で…

信康 無事ではあったが、皆の踊りを台無しにしてしもうた上に、とんだ誤解を招いてしまったわ。(ト寂しく笑う)

みの 殿様…

信康 何だ？

みの みのを抱いて下さいまし。

信康 みの…

みの 抱いて…

ト信康の腕に抱かれる。

この時、徳姫と侍女二人、本花道より登場。

侍女 甲 なんと、踊りの衆が一人も見えませぬ。

侍女 乙 ほんに奇ッ怪なこと。

徳姫 それに夥しいこの血、まさかわが君のお身に…

侍女 甲 あれに人影が…(ト上手寄りを指す)

侍女 乙 暗くてしかとは見えませぬが、あれは信康君では…

徳姫 えっ？(ト目を凝らして見て)

徳姫 あの女子へおなごは？

侍女 甲 (言にくそうに) 築山の御前様ご鼻肩の医師・滅敬が、武田の浪

人の娘をお薦めしたと聞いております。

侍女 乙 (これも言にくそうに) 類希なる美形と聞きおよびます。

ト徳姫と侍女たち、舞台上手に至る。

徳姫 殿…

ト信康振り向き、

信康 (驚いて) 奥…

みの 奥方様？(ト地面にひれ伏す)

ト信康と徳姫の視線絡みあったまま、

*音楽更に高鳴り、

幕

第二幕 第一場

天正七年（一五七九年）六月および七月。岡崎城内徳姫居室および浜松城内の広間。

舞台下手を徳姫の部屋、上手を浜松城の広間とし、すべて照明にて分ける。

舞台後方にかなり高めの山台あり、紗幕が下りていて、信長に扮する役者が控えている。紗幕は終始上がることなく、

信長は紗幕内の照明にのみ浮かび上がる。

徳姫にもスポットが当たるのみで、室内の調度その他は、信康の登場まで見えぬ方が望ましい。家康はスポットのみ。

ト徳姫、文箱を前にしている。

徳姫

父からの書状：

父からの手紙というのに

いつも

懐かしさを感じないのは

なぜなのか。

かつては

父に言われるまま

岡崎のことを

何かと書き送ったこともあった。

今はそれが辛い。

政略のため

何も知らぬ子供頃

岡崎に送られてきた。

でも今は

わが君を、三郎様をお慕いしている。

政略のため：

：築山の母上様も

同じ身の上：

ト徳姫、文箱より手紙を取り出し読み始める。

*音楽の速度、やや上がる。

ト紗幕内に照明が入り、信長が代わる。

信長 婿・三郎殿にとかくの噂あり。一々が誠かどうか、お前に尋ねた

い。

ト手紙を読む徳姫の手が震えてくる。

信長 ひとつ。わしが尾張からつけてやった小侍従を、些細なことから

手討ちにしたこと。

徳姫 はい、：しかし、小侍従にも非のあること：

信長 （徳姫の言葉に重ねて）無念の小侍従は成仏出来ぬまま、怨霊となっ

て日夜岡崎の城をさまよい歩くとか：

徳姫 そのようなことも、：ございました。

信長 （さらに徳姫の言葉に重ねて）そのため、家臣の動揺甚だしいと聞

きおよぶ。

徳姫 いえ、わが君・三郎様は、岡崎衆の結束を護るため、心を鬼にし

て小侍従を斬られたのでございます。

信長 （徳姫の言葉には無関係に）ふたつ、三河の国に風流へふりゅうへ

踊りなる亡国の踊りが広まりおるとのこと。領主・三郎殿自らがそ

れを好むばかりか、踊り手の拙きを理由に、これを弓矢にて射へい

殺したという。なおも、それを止めたる僧侶をも、無残に殺したと

もある。

徳姫 いえ、いえ、

信長 みつつ、三郎殿乱行のこと。武田の家人の女へむすめを妾とな

し、その方をないがしろにしているとのこと。

ト徳姫、あらがう力を失ったごとく小声にて、

徳姫 いえ…いえ…

いえ…いえ…

信長 築山殿、甲斐の医師を仲立ちに武田勝頼と通じ、三郎殿共々、この信長に叛旗を翻そうとしている！

徳姫 もうおやめ下さい！

ト手紙を放り出す。

この時、「殿のお渡り」の声あり。

信康、足早に姿を見せる。徳姫、手紙を素早く巻き取る。

信康 奥、

徳姫 これは殿。

信康 何分にもこの暑さ、そこで水遊びと思つたのだが、奥も参らぬか？

徳姫 (切り口上にて) ならば武田の女へむすめ)をお連れになればいいかと：

信康 武田の女へむすめ)？

徳姫 はい、風流踊りの宵の：

信康 みののことか？

徳姫 みのと申しますのか：

信康 あれは武田の女へむすめ)などではない。戦で二親をなくした哀れな百姓の娘だ。それに、あの夜から会つてはおらぬ。

徳姫 会つてはおらぬ、と：

信康 どこぞへ姿を消してしもうた。

徳姫 甲斐へ戻つたのでは？

信康 まだ言うか。あれは武田の女へむすめ)などではない。あれは武田の者に：(ト言いかけて口を噤む。ややあって)、：奥、おれと共に参るか？

徳姫 今日気分がすぐれませぬゆえ。

信康 (語気荒く) それは邪魔したな！

徳姫 ト帰ろうとすると、

信康 お待ち下さい、殿。安土の父より書状が参りました。

徳姫 (鼻白んで) それで：

信康 …殿に：…とかくの噂ありと：

信康 噂？

徳姫 …粗暴のふるまいありと：

信康 粗暴？ (ト笑つて) ならば奥、その方の父、安土の舅殿はどうじゃ。叡山まで焼き打ちにしたのは粗暴でないのか。

徳姫 それは：

信康 いつぞやも申したとおり、信長殿は信長殿、この信康は信康じゃ。あの小賢しい小侍従のように、いつまでも清洲の安土のと申すな。

奥は岡崎の者ぞ。早よう世継の男子を生め。さすれば、清洲や安土は忘れられよう。(やや間あって) それとも、まこと武田の女へむすめ)でも召し出して、おれの子を産ませてみせようか。

徳姫 ト強く言い捨てて退場。

信康 徳姫、激しい衝撃に身を震わせていたが、ややあって信長からの手紙を畳の上に一気に広げて、

ト叫んで、手紙の上に身を投げて激しく泣く。

引続き浜松城内の広間となる。

安土より単身戻つた酒井忠次を迎えたところである。

家康の回りには陪臣が居並ぶ心にて(家康独り芝居)、

忠次、なぜその方ひとり安土より戻つたのだ？

ト以下、忠次その他陪臣との対話のある心で、

家康 なに、信長殿が三郎にいかい腹立ちとな、なぜじゃ？

家康 武田と内通？ 馬鹿を申せ！ 三郎はわしと共に、日夜武田と戦つておる身ぞ。

家康 徳姫が訴状？ おろかなことを：

信長 ト信長が紗幕内の照明にのみ浮かび上がる。但し、対話を交わす心ではなく、

信長 浜松殿、確たる証拠のある上は、婿殿の始末、お任せ申すがよろしいな？

同
第二場

家康 お主らがついておりながら、何たることじゃ。
家康 親吉、その方が腹を切ると申すのか。安土殿のあの気性、そんなことでは済むまい。無駄死になるだけじゃ。（語気荒く）ええ、もう言うな！

信長 浜松殿、婚殿の始末、速やかにされよ！
ト再び信長が紗幕内の照明にのみ浮かび上がる。

家康 岡崎へ参る！ 支度せい！
ト紗幕内の信長の影が伸び、家康に覆い被さるかに見えて、

道具廻る。

天正七年（一五七九年）八月二十九日、佐鳴湖畔富塚辺の藪。
一面に蘆の繁る中、舞台中央にのみ窪んだ場所がある。下手に小さな池のある心。

ト築山殿、中央の床几にて休んでいる。両脇に侍女丙および丁。

そこよりかなり上手側に離れて、石川義房、岡本時仲、野中重政の三人が円陣を組むように休息している。三人は小声で何か相談している様子。

*楽器の数をかなりおさえた、ものさびしい音楽が流れている。

築山殿 いつまで休むのじゃ？

石川 今しばらくご休息を。

築山殿 ここはどこじゃ？

石川 水音がしておりますのが佐鳴湖と申す湖（へうみ）にて：

名は存じておる。ならば浜松は目と鼻の先。よい加減にして、早う出立を致そうではないか。

ト警護の三人、答えない。

築山殿 出立じゃ！

ト床几から立ち上がる。侍女二人、それにつづく。

石川、岡本、野中の三人、突如平伏して、

石川 御前様、浜松にお送りは出来ませぬ！

岡本 御前様、浜松にお送りは出来ませぬ！

野中 御前様、浜松にお送りは出来ませぬ！

築山殿 何と申す？

石川 ここにてご自害を願わしゅう。

岡本 ここにてご自害を願わしゅう。

野中 ここにてご自害を願わしゅう。

築山殿 何と… 家康殿がそう申されたか？

石川 いいや、われらが一存にて、

岡本 なにとぞ、

野中 おききとどけを。

築山殿 いずれこのようなこともあるかと、覚悟は出来ていた。じゃが、今ここで死ぬるわけにはゆかぬ。浜松へ行き、家康殿にお目にかかって、三郎殿が命だけはお助けただかねば。（哀願するように）のう、母の心、わかっはくれぬか？

岡本 それならば尚のこと、ここにてご自害を願わしゅう。

築山殿 何と？

野中 若殿の、信康君のおん為でございますぞ。

築山殿 三郎の？

石川 されば、安土の右府様、一番のご立腹は、御前様が甲斐の武田に

内通されたこと。

築山殿 左様な、ばかな！

石川 滅敬なる者を介して御前様に宛てられた武田勝頼からの密書をば、信長殿はお持ちとのこと。

築山殿 何？

岡本 あるいはか娘婿の若殿までその謀叛に荷担されたとして、信長様のお怒りは鎮めようもございません。

野中 かくなる上は、謀叛のことは御前様お一人のこととされて、若殿のおん為、ご自害下され。

築山殿 その方たちの気持ち、わからぬでもないが、やはり家康殿にお目にかかって一言申し上げるまでは、死ぬるわけにはゆかぬ。

野中 未練でございましょう。ごめん！

ト野中、太刀を引き抜きざま、築山殿の右の肩口を切り下げる。築山殿、地に倒れ、

築山殿 何を…する…

ト懐剣に手をかけた侍女丙、丁の兩名は、石川、岡本によって斬り伏せられる。

野中 若殿のことは、われら命に代えてお護り申し上げます。お覚悟めされ！

ト野中、太刀を振り上げる。

築山殿、伏せたまま、

築山殿 待て、わらわも今川の血をひく者。見苦しいことはせぬ。衣服など整えて討たれようぞ。

ト打掛の前を整え、西と思しき方を向いて座り直し、ややあつて、

築山殿 思えば短い命であった。

心にかかるは

三郎のこと。

母の浅はかから

辛い定めを残してしまった。

三郎殿

母を許して下さい。

(手を合わせて)

西方にある浄土とは

どのようなところであろう。

今川のお屋敷のような

匂うがごとき所であろうか。

(静かに懐剣を取り出し)

三郎殿

母を許して下さい。

三郎殿

生きられよ。

三郎殿…

ト懐剣の上に倒れ込む。

野中、かけ声と共に太刀を振り下ろす。

石川 お見事なご最期！

岡本 御前様！

ト兩名平伏する。

野中、下手の池にて太刀の血を流し、それを鞘に収めながら大音声にて、

野中 築山の御前様にはご自害めされた！

石川 御前様にはご自害めされたぞ！

岡本 御前様にはご自害めされたぞ！

野中 足軽共、手を貸せい！ お亡骸を西来院までお運び申し上げるのだ！

ト足軽が駆けてくる足音にかぶせて、暗転。

同
第三場

天正七年（一五七九年）九月二日。浜松城内、奥庭に面した家康の居室。

上手寄りに一段高い家康の居室。その他は奥庭にして、本花道は城内の径の心。

嵐の夜。激しい雨が降っている。

*舞台裏からは、合唱による不気味なヴォカリーズが響いてくる。

ト家康、雨足を眺めながら、

家康 岡崎を出した三郎を

大浜へ

大浜から堀江へ

堀江から二俣へと移して

ひと月が経とうとしておる。

いずれも水辺に面した城。

城の主も三郎も

この謎に気づいてはおらぬようじゃ。

（深い溜息をつく）

*舞台裏から響くヴォカリーズ再び。

ひどい嵐じゃ。

このような夜こそ

またとない機会でもあらうに。

ト障子を閉めようとして、庭に誰かいるのに気づく。

家康

誰じゃ？

ト、スポットに簀笠を付けて平伏している男の姿が浮かび

信康 私でございます。

ト簀笠をとると、粗衣をまとった信康である。

家康 （驚いて）三郎か？

信康 はい。

家康 三郎、誰の許しをえて…

信康 （父の言葉に挑むがごとく）誰の許しもえてはおりません。信康が一存にて。

一存にて。

家康 嵐の中、二俣より参ったのか？

信康 はい。

家康 この雨だが、上げてやるわけにはいかん。

信康 もとより承知のこと。

家康 何用あつて参った？

信康 されば、二俣の忠世の申すには、築山の母上様ご自害とのこと。

家康 左様。

信康 父上様が命じられましたか？

家康 いや、女のことゆえ、どこぞに逃がしてやればよいものと思つておつたが、岡崎の者共が先走りおつた。

信康 まこと父上様が命じられたのではないと…

家康 ない！ よいか三郎、母はお前のために死んだのだぞ。

信康 なんですと？

家康 武田への内通の疑い、母は一身に背負うて死んでいったのじゃ。

信康 母上が、左様なことを…

信康 ト兩名ともしばしの沈黙。

信康 父上様、この信康、あれこれ言い訳致しとうはございません。

しかしながら、武田への内通のお疑いだけは、天地神明に誓つてな

いこと…

家康 …わかつて…おる…

ト兩名、互いの目を見交わす。

信康 ならば信康お暇致す。

家康 帰るのか？

信康 はい。

ト兩名とも再びしばしの沈黙。

信康 父上様、ご壮健にて。

家康 その方も体をいといえよ。

信康 しからば、ご免。(ト足早に本花道を退場)

ト家康、わが子の消えた闇を見つめていたが、ややあって、

家康

三郎： 一本気で性急なところ

子供の頃から

変わっておらん。

いっぞやの戦で

この父を先に引かせ

寄せ来る敵を蹴散らして

見事殿へしんがりゝを務めたことがあったの。

この父が

お前をどんなに

頼りにしていたか

わかっておるか。

母・築山もその方も

護ってやれなんだこの父を

笑うてくれるなよ。

これが

戦が習いとなった

世の定めというものか。

三郎：

三郎！ *最後の叫びに金管の咆哮が重なるようにして、

急速な暗転。

同 第四場

天正七年(一五七九年)九月十五日。二俣城内の一室。

*心穏やかな音楽に続いて幕開く。

上手寄りに家台。上手奥、および仮花道は長廊下の心。本

花道は用いず。下手は薄、萩の咲き乱れたる庭の体。

暮れやすい秋の陽が中天を過ぎた頃。

ト信康と二俣の城主・大久保忠世とが碁盤を挟んで対座し

ている。信康が更に一目を置く。

若殿は剛い碁を打たれる。

信康 勝負は勝ち・負け、いづれかしがあるまい。

忠世 時には引くこともなされねば…

ト信康、碁石をまさぐりながら忠世を見つめて、

また、あの話か：

ト忠世、突如座を下がって平伏しながら、

若殿、この二俣は山あいの城。いずこへなりと落ちのびられよ。

信康 親父殿がそう申されたか？

ト忠世、黙っている。

信康、重ねて語気強く、

親父殿がそう申されたのか。(やや落ち着いて)…そうではある

まい。信康を逃して、その方が腹を切るつもりか？

ト忠世、無言で信康ににじり寄り、平伏する。

信康 それとも、二俣を抜けて甲斐の武田へ走れというか。

ト忠世、ハッと信康を見上げる。

信康 引くことは出来んのだ。…さ、勝負はまだついておらん。

ト忠世、平伏したまま碁盤に戻り、再び信康と対座する。

家臣の一人、仮花道より出で来たりて（以下、歌ではなくセリフが望ましい）、

家臣 申し上げます。只今服部半蔵殿、天方通綱殿、浜松よりお着きに
ございます。

ト信康、忠世、静かに碁盤より顔を上げて互いの顔を見る。

忠世 あいわかった。

ト家臣の一人、畏まって下がる。

ト入替わりに、服部半蔵、天方通綱の両名、ゆっくりと仮

花道を進み出る。

*この間、静かな音楽が続き、信康は忠世を促して再び碁盤に目を落としている。

ト半蔵、通綱の両名家台にたどり着き、

半蔵 若…

お久しゅうございます。

信康 半蔵、通綱、よう参った。まもなく勝負がつくゆえ、しばし待て。

ト半蔵、通綱軽く頭を下げる。

信康、忠世、しばらく碁石のやりとりをし、

忠世 また若殿の勝ちでございますな。

信康 信康最後の勝ち戦かの。

ト半蔵、こらえきれずに嗚咽する。

信康 通綱は知らず、普段陽気な半蔵がどうした。

通綱 若殿、大殿より…

（通綱の言葉を遮って）これか？（ト切腹の形をする）

ト通綱、黙って平伏する。

信康 二侯へ移されてより一ト月。親父殿もさぞ苦しまれたのであろう。

ト半蔵、突如進み出て、

半蔵 若、ここより北は山また山の難所。まして武田と相對する地に追

手をかけることは出来ませぬ。どうぞお逃げ下され。

信康 半蔵、お前までそのような… お主らに腹を切らせ、信康一人逃

げよと言うのか。戦の場でも、信康はいつもお主らの先頭切つて戦つてきたではないか。おれの命ひとつで事は足りるのだ。

半蔵 かし…

信康 （激昂して）まだ言うか。それほど申すなら、その一命を賭して信康が首を取つてみよ。おれもお前を斬り伏せて、見事この城から抜けてみせよう。

ト刀を抜き払う。半蔵、斬られる覚悟で刀の柄に手をやり、

通綱、二人の間に割つて入ったその時、

家臣 申し上げます。かねて若殿にお目通りを願つておりました娘が、

只今お城追手口にて自害を…（先同様、セリフが望ましい）

ト信康、弾かれたように進み出る。

信康 娘…？

忠世 はい、みのと申し、若殿にお目通りを願つておりましたが、身分卑しき者ゆえ…。（やや言い激んで）また若殿は追放のお身の上、

城の者の目もありますれば…

信康 （放心したように）これへ連れてまいれ…

ト忠世、家臣の者に目くばせし、家臣畏まって急ぎ退出する。

*「愛」の動機が低く、静かに嗚っている。

ト半蔵、通綱の両名が声低く、信康とみとの間について

忠世に説明する様子のうち、

仮花道を、戸板に載せられたみのの死骸が四人の番卒によつて運ばれてくる。みの、白装束に身を固め、その胸を鮮血

が染めている。

信康、思わず刀をとり落としてみのに駆け寄る。

みの！

何という姿に…

信康

みの！

母上ばかりかお前までが

おれを置いて旅立つのか。

みの

おれはお前を嫌ったのではない。

遠ざけたのではない。

おれはお前をいとおしく思っていた。

…だが

おれは奥も愛していたのだ。

おれは：岡崎の家を

護らねばならなかった。

(みのの頬に手をやって)

みの：

あの風流踊りの夜のまま

お前は美しい。

(みのを抱き起こし)

ただ一度抱いたお前の体の温もりを

おれは忘れてはいない。

みの

覚えているか。

(子供たちの歌を低く呟くがごとく歌う)

《欲しや、欲しや

どの子が欲しや》

*以下、この低吟に重なるようにして、

忠世 この娘の命あるうちに

会わせてやればよかった。

悔いがわしの胸を噛む。

みの殿はとうとう

若殿と結ばれることなく

逝ってしまった。

「通網

大きな悲しみが

この身を刺し貫くようだ。

わしの子感に当ってしまった。

みの：

徳川も今川も

：織田もない世界へ

二人して行こう。

みの：

ト信康、みのの体に羽織を脱いでかけてやる。

*《欲しや、欲しや》の旋律が子守唄のように穏やかに揺曳

する。

トその中を、再びみのが運ばれて行く。その葬送の列にか

ぶせるように、

信康 人の一生は夢のようなものだと言うのではないか。ならば、今死の

うも夢、生きのびようもまた夢だ。

ト半蔵、通網、平伏して泣いている。

信康、意を決したように、

信康 はや陽も傾いた。これ(ト首を落とす真似をして)の支度も整う

ておろう。いざ…

*オーケストラのトゥッティが鳴り渡る。

ト屏風を張りめぐらした切腹の席が現われる。

一旦退出した信康、やがて白装束にて登場(セリ上がり

が使えれば、それが望ましい)。

信康 通網、

通網 はっ!

みのの亡骸、手厚く葬ってやってはくれぬか。：頼んだぞ。

ト通網泣いている。

信康 通網。奥に：徳姫に伝えてくれ。《生きよ》とな。

通網 (しほり出すごとく)はっ!

トこの間に支度が整う。信康、作法に従い腹に刃を突き立てて、

信康 半蔵ッ、介惜！

半蔵 はっ！（ト刀を振りかざすが、腕が震えて振りおろすことが出来ない）

信康 （苦しい息の下から）半…蔵…

半蔵 若！（ト叫んで、刀を放り出してしまふ）

信康 （三たび苦しい息の下から）半…蔵…

通網 若殿のお苦しみ、見るに忍びませぬ。ごめん！

ト刀を振りおろす。

*打楽器の激しい一撃にて舞台暗転。

ト家台下手寄りに半蔵、通網のみ。半蔵ひそかに嗚咽している。

通網 半蔵…

ト半蔵、弾かれたように顔を上げる。

通網 すべて終わった。わしは若殿の菩提をとむらう。大殿には、半蔵、

おぬしがお知らせするのだ。

ト半蔵、答えない。

通網 よいな、半蔵…

半蔵 （ト突然立ち上って庭にかけおり、刀を減法に振り回し、地に身を

投げて激しく泣く）若、若…殿…

ト通網、黙って立ち尽している。

月が冴え冴えと照る中に二人の男の姿ばかり。

*音楽一段と高鳴り、

暗転。

同 第五場（大話）

天正八年（一五八〇年）二月。浜松城に続く梅林。

舞台一面に梅の吊り枝。

舞台一面の平舞台はその梅林の心。

本花道は街道、仮花道もまた街道である。

遠見に浜松城の天守閣。

ト石川義房、岡本時仲、野中重政の三名と数名の若侍が舞台上手寄りの繁みに身を隠している。士へさむらいへたちは皆殺氣立っている。

石川 恨み重なる徳姫、

岡本 築山の御前様、若殿・信康君のご無念、

野中 せめて一太刀なりとも晴らしてくれよう。

石川 安土へ帰られては、

岡本 もはやわれらの手に届かぬ。

野中 今日を逃してなるものか。

石川 一太刀なりともこの恨み、

岡本 一太刀なりともこの恨み、

野中 一太刀なりともこの恨み、

若侍たち 一太刀なりともこの恨み、

石川 今日を逃してなるものか。

岡本 今日を逃してなるものか。

野中 今日を逃してなるものか。

若侍たち 今日を逃してなるものか。

ト徳姫、侍女二人を従えて登場。

侍女 甲 姫様、お待ち下さい。

侍女 乙 姫様…

徳姫 城の誰彼に涙を見られとうはない。姫たちを、ここまで連れて来

てはくれぬか。

侍女 甲 かしながら：

侍女 乙 このような場所にて：

徳姫 (涙ながらに) 姫たちとの別れぞ：

侍女 甲 わかりましてございます。

侍女 乙 わかりましてございます。

ト侍女二人、姫たちを迎えるべく奥へ入る。

石川 おお、天の助け！

岡本 恨み重なる徳姫、

野中 今こそ恨み、

若侍たち 晴らしてくれよう。

トそれぞれ太刀を手に飛びだそうとした前に立ちはだかつ

た僧衣の人物。

石川 何奴？

岡本 邪魔だて致すな！

野中 坊主とても容赦はせぬぞ！

若侍たち 退け、退け！

ト僧衣の人物、笠を取って、

通網 わしじゃ。

石川 や、天方殿！

岡本 出家されたと伺ったが：

通網 左様、これより高野のお山へ行くところ。

野中 何ゆえ邪魔をされる？

通網 お主らは、大殿のお心も、若御台・徳姫様のお心も知らぬからじゃ。

石川 何と、徳姫の心とな。

通網 そうじゃ。

野中 いや！ 恐れながら、大殿とて同じ。

岡本 天方殿とて、大切な若殿を殺されたではないか。

山城 待て、待てと申すに。大殿のお心、若御台のお心を知ってからで

も遅くはなからう。さあ、下がれ、下がれ！

ト皆を上手の繁みに追いやる。

徳姫、やや春の香りを含んだ風を頬に受けている。

梅の花びらが微かに舞っている。

徳姫、天守の方を振り返り、

わらわのまわりでなにが起り

なにが終わった？

殿：三郎様：

わらわが嫁いできた日

殿は九つ、私も九つ：

ままごと遊びのような夫婦(へめおと)でした

人形は好きか、と殿は言われ

わらわに小さな人形を抱かせて下さいましたな。

そう、二人の暮らしはままごとのように

夢のように過ぎてきました。

夢？

まことに？

あれは悪い夢で

殿とわらわは今でも

ままごとのような夫婦(へめおと)で：

いえ：

いえ：

わらわのまわりでなにかが起り

なにかが終わった：

(瞳を上げて)

よい風：

風が吹いて

梅の花びらがあんなに：

風が吹いて

今川も、織田も、徳川も

いずれあの花のように飛び去る運命へさだめだというのに。

殿… 三郎様…

ト徳姫、声を殺して嗚咽。

この時、二人の幼い姫が奥より駆け出る。侍女二人もつづいて出る。

年下の姫 母さま…

年上の姫 母上様…

ト徳姫に縋りつく。

徳姫、二人の幼姫を両のかいなに抱きて嗚咽。ややあつて、

徳姫 おじいさまの申されることをよくきくのじゃ。よろしいな。

ト年上の姫、黙つてうなづく。目に一杯涙を浮べている。

年下の姫（あどけなく）はい！

ト侍女二人も、堪えきれずに声を上げて泣く。

この時、多くの者を従えた家康、徳姫の見送りに出て来る。

徳姫を乗せる輿も続いて出る。

家康 姫たちのことは心配めさるな。必ずや良き嫁ぎ先を心致すゆえ。

ト徳姫、瞳をこらして家康の顔を見つめ、

徳姫 良き嫁ぎ先よりも、まこと心の通う御方のもとにおやり下さい。

ト家康、ハツとして徳姫を見て、

家康 ……そのように…致すであろう。

徳姫（意を決したように）義父君様…

家康 何じゃ？

徳姫 ああ折、なぜわらわを安土にやってはくれませなんだ。安土の父

に、三郎君の命乞いを致さなかつたこと、いまだにこの胸が責めら

れてなりませぬ。

家康（やや鼻白んで）三郎の十二の罪状、織田殿に書き送つたそのこと

が、何の命乞いじゃ。

徳姫 十二の罪状？ そのようなものを書き送つたことはございません。

父はすべてを知つておりましたのじゃ。父・信長も、また義父君様、あなた様も皆恐ろしい方々じゃ。…戦に明け暮れるこの世の中では、女はこのようにしか生きられぬものか…

ト輿が徳姫の前の静かに進み出て、徳姫はそれに乗り込む。二人の姫が輿に駆け寄り、徳姫の袂を掴んで泣く。家康、独り離れたところにて、

家康 姫、

その方にはわかるまいが

今川の血は断たねばならぬのだ。

わしはもはや

今川の一員ではない。

織田殿と共に歩み

いずれば天下を

わしの手収めてみせよう。

築山の血、三郎が血

決して無駄にはせぬぞ。

ト繁みの士へさむらいたち、泣いている。通綱、彼らを

笠で導き、上手より密かに退場させる。

この時、輿の先頭の武士の「出立」の声。

*合唱のハミングに乗せて、輿が静かに上げられる。

家康

女がそのようにしか生きられぬなら

男もまたこのようにしか生きられぬ。

この戦の世を

家康が必ず収めてみせよう。

のう、三郎…

ト輿は、本花道を静かに進んで行く。

通綱、笠の内より家康に軽く会釈をして、やや思い入れあつ

て後、仮花道を静かに歩み始める。

遠見の天守閣が燦然と輝いている。

*合唱のヴォカリーズを重ねて、
梅の花びらが雪のように舞う中、

幕